
もしも新小説やるなら

レンレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もしも新小説やるなら

【Nコード】

N2500U

【作者名】

レンレン

【あらすじ】

もしも次回作をやるなら、第一話というかだけ作って置きます。

もしも新小説やるなら→現実↓アビス↓?..?..編→(前書き)

こんなに書くつもりなかったのに…

もしも新小説やるなら→現実↓アビス↓???編↓

それは、とある街でおこった出来事

夜の工事現場にいる一人の若者。

彼の名前は柊冬夜（仮）。

歳は17歳

職業、フリーター

趣味は特に無し

そんな彼がいつものように仕事をしていると不意にクラクションが耳に響いた。

ふと顔を向けるとトラックが迫り来ていた。

柊冬夜

享年十七歳

死因、加害者側の飲酒運転により引き起こされた事故死。

Side out—

—
—
冬夜
S i d e

「……………」

「あゝ、君？」

目を覚ますと、見たことのない場所だった。次いで目に映ったのは、女性の姿。

「…………誰ですか？」

「反応薄いねーキミ。」

その女性はとにかく美しかった、遠目からでも分かるほどに美しい金の髪、肌は白く、腰や脚も細い、胸も日本人女性の平均よりも大きいだろう。

そして何よりも目を引くのは、外人嫌いの人でも恋慕の情を抱きそうなほどに整った顔立ちだった。

「ねえ、聞いてる？」

「え、ああすみません、もう一度お願いします。」

「どうやら、何か話しかけていたらしい。」

次はちゃんと聞こう。

「だから私はあなた達が言うところの神様、そこまではオツケー？」

「ああ、そうですか………」

それなら、この神々しさも頷ける。

「だから反応薄くない？ まあいいや……それで、その、ごめんなさいっ!!」

「ああはい、いいですよ。」

「そっか、そうだね……何の説明もしてないのに許すも何も………
って、ええっ?!」

「ああ：間違えました、別に何でもいいです。」

「えーっと…キミさ死んじゃったのは分かってる？」

「はい」

「私が謝ってるのはね、本来は死ななかった筈のキミの人生を終わらせてしまったからなんだよ？」

「はい、なんとなく理解してます……テンプレ、ってやつですよね」

「いや、よく分かんないけど………」

「まあ冗談はともかく、別にどうでもいいんですよ…ただ死ぬのが早まっただけ、でしょ？」

「なっ…まあいいわ、本題に入りましょうか…あなたには転生してほしいのよ、私が管轄する世界にね。」

「大変ですね」

「他人事じゃないのよ……これから私が管轄してる世界から、何処に行くのかを決めてもらうわ。そのあとに、あなたが望む能力をいくつか付加するわ」

「世界は何処でもいいですし、境遇もなんでもいいです…ランダムにでもしててください。」

「え…いいけど、どうなるか分からないよ？」

「ええ構いません、能力も別にいりませんし」

「はあ……送り出して早々に死なれても困るし、能力は適当に見繕っとくわ」

「それはどうも」

とまあ、こういった具合で話が進んでいった訳だ。

「じゃあ、送るわね」

「その前に一つ、聞きたいことが…」

これだけは聞いておかないと…

「なに？」

「俺が死んで、妹は……どうなりましたか」

「あなたの妹さん…しっかりしてるのね、葬儀から何から全部自分で熟しているわ」

「そう、ですか…ならいいんです。じゃあ失礼しますね。」

こうして俺は世界を渡った。

s i d e o u t

「ちょっと気になる、かな…」

彼が消えた直後、彼女は言った。

「死んで魂だけでここに來た時、彼の魂の輝きは今までで最高レベルだった……」

それは数千年前に訪れた彼の有名なキリストを凌駕するほど。
なのに、だ

「生前の記憶、肉体、それらを呼び戻した途端に魂を靄が包んだ…
……」

もちろん、そういった現象を見たことがなかった訳ではない。

ただ、あの輝きならば、ああはならない筈…つまり

「よほど悲惨な人生を歩んだということ、か………そういえば、彼はどの世界に行ったのかな、おっとこれか…ふむふむ、それで境遇

はっ……え」



ここは……どこだ？

辺りを見ると、どうやら培養機らしきカプセルの中に入れられている。

なるほど、前世もヒドかったが、今回もいいもとは言えないらしい。

「ふは、フハハハッ、ついに……ついに譜石帯への送受信機を作りあげたぞ！！これで忌ま忌ましくも世界を手中に治めたあの小娘に取って代われる！！」

ふと外を見遣ると、科学者であろう男が白衣も着ずに何かを叫んでいる。

「意識が芽生えたか……やあ、お前のおかげで世界は変わる……我々は変革者とな……『ビーツ、ビーツ』何事だっ！！」

ヤツの言葉を遮ったのは警報音。

恐らく部下に状況の確認をしているのだろう。

「ほ 報告します……！ 敵が……ローレライ教団が乗り込んできて……ぐわあっ！」

「何があった、報告を続行せよ……！……ちっ、まあいい、こいつを連

れ出せさえすれば：「連れ出せれば、どうなる」：ッ」

俺を作った男は敵がいることに気づかなかったのだろう、ただ油断していただけかもしれないが。

「馬鹿なっ、このブロックは最下層の中でも外れに位置するんだぞ
：簡単に見つかる訳が：ッ」

「ふん、私達がなんの策もなしに突っ込んでくると思っていたのか
？：既にこの研究所は制圧した。」

警報音が鳴りはじめて少ししか経っていないのに：もう制圧したら
しい。

「：事前に調べていたというのかッ」

「さてな」

「隊長、この子供はどうしますか？」

……俺のことか

「：私が処分する、お前はこいつを連れていけ」

「はっ」

そう言われ、部下の男が科学者を連れて出ていった。

しかし隊長と呼ばれた男は俺に近づいてくる。

「悪く思うなどは言わんし、恨むなり呪うなりしてくれても構わん
：…君を生かせば新たな戦の火種になるやもしれんのだ：」

「……」

体が動かない：肉体を培養機に入れられ、生まれてから身体を動か
していないせいだろうか。

「…さらばだ。」

隊長と呼ばれた男の大剣が迫りくる…転生生活十分そこそこ、かあ

「…………ふっ!!」

「…………」

迫り来る死を待つように俺は目をつむった。

「待ってッ!!」

「ユリア様…………」

しかし死が訪れることもなく、目を開けると目に映ったのは栗色の髪をした少女がいた。

そしてこの少女との出会いが俺の運命を大きく動かすことになる。



あれから、もうすぐ10年が経つ。

俺は、あの時隊長の刃から守ってくれた少女専属の騎士となっている。

科学者に作られたこの身体は、武術や譜術の才能にも長け、今では副隊長もしている。

「ゼヘル・ソートグラス、ただ今参りました。」

「…入って。」

言葉通りに入室し、部屋にいる女性を見る。

彼女の名はユリア・ジュエ…ローレライと契約した少女であり、先程にも言った通り、俺が守るべき人である。

「ユリア様、何かご用でしょうか？」

「…明日のことについて、なのだけれど」

……？

いつもなら敬語を使うなど最初に言うんだがな…

フォニック・ウォー

「ええ、譜術戦争の戦地へ赴き、和平を結ばせるのでしょ…？」

「そうね…けれど今回はそれが本題じゃあないのよ。」

…？

それ以外に何があるというのだろうか。

クローズド・スコア

「秘予言については知ってるかしら？」

「え、ええ、周りへの影響が大きく通常は詠むことすら許されないというアレですね」

それは個人の死についても同じ扱いを受け、教団の中でも極僅かの人間にしか詠むことは許されない。

「この間、あなたのそれを見たのよ…：あなたは明日の戦争で両軍を止めるため尽力する、しかし流れ矢から私を庇い、戦死すると…」

目を伏せていた彼女が俺を見つめる。

その目にはただならぬ決意が滲み出ている。

「まさかユリア…何を考えている!？」

「そうなる前に、あなたを別世界へ飛ばします。」

「なっ、待て…ぐっ、体が動かない!？」

「……」

俺がもがいている間にも彼女は呪文を詠唱し、歌を歌う。

瞬間、ユリアの背後にはローレライが現れ、彼女と俺の足元に一つずつ陣が浮かんだ。

今までに見たこともない術式。

恐らくローレライと契約した彼女にのみ許された特殊な術だろう。

「……」

「待ってくれッ、君を守るためなら俺はどうなっても構わないッ…
…それに俺はまだ貴女に何も返せていないのにッ!!」

「あなたには生きなければならぬ…いいえ、私がそう望んでいる
の」

「そんな…ッ」

「ゼヘル・ソートグラス、これよりローレライ教団、第一隊、副隊長、及び私の騎士としての役割を解任します。」

「クソッ、動け…動けよっ俺の身体ッ!!」

「今まで本当に…」

ありがとう。

「ユリアッ、ユリアーッ!!」

ユリアが持つ杖が俺に向く。

すると部屋は光に包まれていった。

最後に見えたのは、彼女の精一杯の笑顔と………頬を伝う涙だった。

もしも新小説やるなら〜現実↓アビス↓???編〜(後書き)

ここから他のテイルズシリーズとか、他の何かの作品に行く感じで
すね。

まあ直接ルークのトコに行くのもアリですなw

もしも新小説やるなら魔法少女リリカルなのは編

「ここが海鳴市か…さっさとジュエルシードを見つけなきゃね、フ
ェイト」

「そうだね兄さん、母さんのために…」

ビルの屋上、そこに佇む影が二つ。

そこにいたのは一組の少年少女だった

「……………」

「兄さん？」

急に黙りこくる兄、セレンに対して妹、フェイトが顔を覗き込む。

「ん、ああ取り敢えず、これから住む場所に行かなきゃ…何処だっ
け？」

「たしか向こう方のマンションだよ」

そう言って指を向ける妹に兄は微笑む。

「よし、じゃあ帰宅と地理の把握がてら散歩するとうちか」
「うんっ」

兄と妹

この二人が紡ぐ物語が始まる。

もしも新小説やるなら〜魔法少女リリカルなのは編〜（後書き）

まあ始まらないけどね W

もしも新小説やるなら〜恋姫無双編〜

「はぁ……まったく、あの方ときたら」

おや皆さん、はじめまして凌秀と申します。

いやはや、愚痴から入るつもりはなかったのですが……すみません。

何せ、ウチの主のサボり癖が強いなのって。

現在はその主を探しているのです。

私も政務で忙しいというのに、まったく……

「あ、レイゼルー!!」

ふむ、どこからか私の真名を呼ぶ声が……そうなんです、私の両親は異国の者なんですよ。
というか、この声は……

「ねえ、こつちよー」

「はぁ……策様、主ともあろう者が真昼間から酒宴ですか。文字通りいい御身分ですね、羨ましいです。」

やっと思つけた……

ええ、この方こそが私の主。

孫策様です。

私は先王、孫堅様の頃よりこの呉に仕え、将を任されています。

「え、ちょっと…もしかして怒ってる？」

「逆に怒っていないとお思いですか？ 私には主がやらなかった仕事の一部が回ってくるというのに…」

「うぐ、ちゃんと後でやろうと思ってたもーん。」

「もん、じゃありませんよ。というかそんな所にいたら危ないですし、はしたないですよ。先程から下着がチラチラ見えています。」

眼福…だなんて思ってませんよ、仮にも相手は敬愛すべき主ですから。

欲情するなんて以っての外ですとも、ええ。

「なになに、見たいの？ へへー、閨に来てくれればレイゼルにならいくから見せたって「怒りますよ？」ごめんなさい。」

「はあ…：策様、今降りてきたら私は怒りませんから、早くしてください。」

「もー、ちゃんと雪蓮って呼んでって何度言えば分かるのよー。主が真名を許したのに呼ばないって失礼なことよ？」

「私にその資格はないと何度言えば分かるんですか…：…というか今降りてこないなら怒りま…『シユタツ』よろしい。」

「あーあ、折角美味しいお酒に巡り会えて絶好のお酒日和だったのに。ま、お説教はないってレイゼルが約束してくれたし戻りますか。」

「そうですね、私からはお説教は無しですよ…：ただまあ代わりに誰かが叱ってくれるでしょう。」

「…………え？」

「さあ、部屋には周瑜が待っているでしょう。戻りますよー」

「ちょっと待って！！お願い冥淋には…って引っ張らないでーッ！？」

では皆さん、またお会いしましょう。

もしも新小説やるなら〜恋姫無双編〜（後書き）

因みに私は呉が一番好きです。

雪蓮にhshsしてますw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2500u/>

もしも新小説やるなら

2011年11月11日02時54分発行